

次女の秘め事…？

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

大晦日の夜。もうすぐ年が変わろうかという時間帯。

我が家の住人はベアトリーチェを除けば全員が高校生な訳で、友人同士で集まってパーティをしたり、二年参りに行ったりと、昨今の若者らしい過ごし方はいくらでもある。

だが、普通に家で炬燵こたつに入り、テレビを見ながら蜜柑みかんや蕎麦そばを食べて過ごす者が大半だろう。俺達がまさにそうだ。

「——アサトさん、葱ねぎはあまり細かく切らないでください」

キッチンで包丁を握っていると、隣で蕎麦の茹ゆで具合を見ていたタオエンに注意されました。

「俺、野菜は細かくしたいというか、むしろ入れたくない派なんだが」

「そんなに細かくては何だか判らなくなってしまう。それに、蕎麦のトッピングなので、入れる入れないは好きにしてくださいって構いません」

相変わらずの無表情で、淡々と語るこの少女の名前はタオエン。我が家に居候をしている親戚の三姉妹の次女で、家事全般を一手に担になってくれている。一応、俺も家事は出来るが、あくまで『出来る』レベルなのに対して、タオエンのそれは家政婦レベルだ。誰だつて、食べるなら上手い料理が良いだろう。

三姉妹の長女と三女は、家事に関してはポンコツなので、年越し蕎麦の準備に駆り出されているのは俺だけだ。とは言っても、別に俺が手伝わないといけないほどの手間は無いと思うのだが。

ちらと隣で蕎麦を茹でている鍋を見ているであろうタオエンに視線を向ける。

「——」

俺と目が合うと、タオエンはふいと鍋に視線を戻した。

彼女と面識がない人間から見れば、特に慌てているようには見えないだろうが、普段の無表情を知っている俺からすれば、何かかと思うくらいのリアクションだ。しかも、こういう事が今日は何度もある。視線を感じて振り向くと、何度もタオエンと目が合う。その度に『なんでもないですよ?』とばかりに、目を逸そらされる。

明らかにおかしい。

「なあ、タオエン」

「はい、なんですか」

「今日、やたらと目が合うな」

「気のせいではないですか。自意識過剰も甚はなはだしいですね」

このように、会話の態度は普段通りだ。しかし、咄嗟とっさに目が合ったりすると動揺を隠し切れていない感じがする。『気がする』レベルだが。

しばらく無言で料理に没頭する。だが、大した手間はかからないので、すぐにそれも終わって手持ち無沙汰ぶさたになってしまった。

「まだ手伝う事あるか？」

「いえ。あとは蕎麦そばが茹で終わるのを待って、器に移すだけです」

「そうか」

「はい」

……………。

無言。

俺もタオエンも口数が多い方ではないので、自然とこの組み合わせになると静かになる。それに対して気まずさを感じないのは、共に暮らすようになって、それなりに経つからだろう。だが、今日のタオエンは少し様子が違うためか、沈黙が妙に気になる。手伝う事がないならリビングに戻ってもいいのだが、彼女一人に任せてくつろぐのも微妙に気が引ける。

「なんで今から着物きもの着てるんだ？ 家の中だと窮屈きつこくだろ」

沈黙に耐えきれなくなり、俺はそんな事を訊きいた。

正月に着物を着る事自体は普通だろう。だが、大晦日の夜からとなると、気が早いのはなかるうか。

「ベアトリーチェが早く着たいと言うので、付き合わせました」

「そうか」

「はい」

……………。

また無言。

会話が長続きしない。互いに積極的に話題を振ったり、広げたりするのに向いていない性格なので、こうなるのは必然だが……気まずい。

「じゃあ、俺はリビングに戻るから、運ぶ時は呼んでくれ」

タオエンを一人残していくのは気が引けたが、この気まずい空気に耐えられなくなって、俺は撤退する事にした。

だが――

「ん？」

服の裾すそを掴つかまれた。この場に居るのは俺とタオエンしかいないので、掴つかんでいるであろう人物は一人しかいない。だが、彼女がそういう行動を取る事が想像出来できなかったし、取る理由も思いつかなかったので、掴つかんでいるのが誰なのか一瞬、判らなかつた。

「タオエン？」

何事かと振り返ると、俺は予想もしない光景を目の当たりにした。あのタオエンが瞳を潤ませ、頬を紅潮させ、切なげな表情を浮かべていた。

「……ど、どうした？」

「あ、これは、その……」

我に戻ったのか、慌てて俺の服の裾から手を離し、タオエンは背を向けてしまった。

「もうすぐ出来ますから、もう少しだけ待っていてください。一緒に……」

「あ、ああ……」

なんだ？ 今日のタオエンは、やはり少しおかしい。別に嫌われてはいないが、どちらかといえば『姉と妹に好意を持たれている』という理由で、タオエンからは疎ましく思われている。間違っても、あんな『恋する乙女』のような表情をされる関係ではない。

「……姉さんは綺麗で優しくて頼もしくて、それでいて可愛い一面もあります」

俺が状況に困惑していると、タオエンは独り言のように呟いた。

「ベアトリーチェはあざといところもありますが、あれは処世術であって、本当は純心で健気な子なんです」

本当に独り言なのか、俺からの返事を待つ事なく、淡々と、しかし姉妹に対する愛情を感じさせる口調でタオエンは続ける。

「二人が幸せになれるなら、それが私の幸せです。だから、二人がアサトさんを好きなら、それでいいと思っていました」

そこで一度、タオエンは言葉を区切ると、俺の方に向き直った。

「……でも、そんなのは自分を納得させるための嘘でした。もう、自分に嘘をつき続けるのがつらいんです」

そう言うと、タオエンはおもむろに着物の両肩をはだけさせ、新雪のように白い肌を俺に晒した。血管が透けて見えるのではないかと思える肌の白さと、普段のタオエンのガードの高さからは信じられない光景に、俺は思わず息を呑んだ。ヤミヒメほどではないにせよ、充分な膨らみを持つ胸の谷間が見え、もう少し着物が下がれば、見えてはいけない部分が見えてしまう。

慌てて俺は目を逸らそうと、顔ごと明後日の方向を向こうとする——が、頬を両手でホールドされ、目を逸らす事が出来ない。目を閉じるという選択肢が浮かばなかったのは、動揺もあるだろうが、見たいという衝動に抗えなかったためだろう。悲しいかな、これでも健全な男の子なので。

「アサトさん、私にもまだチャンスは残っていますか？ 私は別にあなたを独占しようと

5 次女の秘め事…?

は思いません。ただ、あなたの都合のいい時だけ、こうして隠れて愛してもらえれば、それで……」

瞳を潤ませ、羞恥しゆうちに染まった表情で訴えかけるタオエンは、俺の知る『三姉妹の冷ややかな次女』ではなく、『悲恋に身を焦がす乙女』だった。

今までは鉄壁のガードに守られ、家事以外で女の子としての一面を俺に見せる事はなかった少女が、こうして秘めていた想いを告白してくれている。そんな状況で何もしない男が要るとすれば、それは聖人か不能か特殊な性癖の持ち主だ。

俺は彼女の肩にかろうじてかかっていた着物を更にはだけさせ、形の良い二つの膨らみを露あらわにする。タオエンは少しだけ身を強張こわばらせたが、隠そうとはせず、むしろ期待に満ちた眼差しを俺に向けてくる。

ならばもう、躊躇ためらう理由はないだろう。

据え膳すは食わねば失礼だから。



「——トさん。起きてください、アサトさん……このダメ人間」

冷ややかな声に呼ばれ、身体からだを少し乱暴に揺さぶられる。どうでもいいが、最後に罵倒された気がする。

「……んあ?」

「起きてください。年越し蕎麦そばが並べられません」

そう言っつて、見慣れた無表情で俺を見下ろすのは、ウェーブがかかった銀髪の少女——タオエンだ。

「蕎麦なんかより続きを——いつて!」

「どこを触ろうとしているんですかやめてください気持ち悪い死ねばいいのに」

無遠慮にタオエンの胸元に伸ばした俺の手を乱暴にはたくと、彼女は蔑さげすみの眼差しを向け、一息でまくし立てた。

「何が『続き』ですか……まさかとは思いますが、私にいかかわしい事をする夢でも見ていたのではないでしょうね気持ち悪い」

タオエンの俺に向ける視線の温度が、体感で氷点下まで下がった気がした。どうでもいいが、『気持ち悪い』というのを語尾みたいに付けるのはやめてほしい。

「まったく。無駄に性欲を持って余す年頃とはいえ、そのような目で同居人を見るなど……いやらしい死ねばいいのに」

6 次女の秘め事…?



無表情に淡々と俺を罵倒するタオエンの姿に、ようやくこれが現実で、先ほどまでの夢だったのだと気付く…夢オチかよ。

「蕎麦そばを運んでもらうつもりでしたが、一瞬たりともケダモノと二人きりになりたくない
ので、姉さんかベアトリーチェに頼む事にします。二人は何処どこですか？」

「たしか、コンビニに行くとか言っただけで出て行っただぞ」

「……つまり、今この家にいるのは私達だけなんですわね」

「おい。露骨に距離を取るな」

やはり夢だ。こいつが俺に好意を持っているはずがない。

「それはそうと——」

キッチンに戻ろうとしていたタオエンが足を止め、顔だけでこちらに振り向いた。

「炬燵こたつで寝ると風邪を引きますよ」

そう言い残し、タオエンは今度こそリビングを出ていった。

……まあ、悪い奴じゃないんだよな。

次女の秘め事…? (了)

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

ソイエス
ZS 〈ツイドチック・ストラテジー〉『次女の秘め事…?』をお届け致します。

まずは——新年、あけましておめでとーございます。現在、2016年元日の午前2時です……はい、年が明けております。正確には、年をまたいで書いております。年末、『モンスター娘のいる日常 オンライン』をやりすぎました。恐るべし、ソシヤゲ。

余談を戻して、今回はタオエンの話です。このシリーズはイラストありきで、描いてから「さて、どうしよう……」と掌編の内容を考えます。その結果、今回はこういう話となりました——夢オチですが。

昔はそうでもなかったように思いますが、昨今はあまり良しとされない夢オチ。個人的には、使いどころを間違ったり、多用しすぎなければいいんじゃないかと思っています。だって、夢オチじゃないとこんな話は……ねえ？

それでは、良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

2016年も小説は続けていきますので、よろしくお付き合いください。

2016/1/1 流遠亜沙

アンケートに答える

『ZS 〈ツイドチック・ストラテジー〉』ページに戻る